

## 第1回学ぶ喜び・ESD連続公開講座 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2019年6月20日(木) 19時～20時30分
- ◇会場 奈良教育大学次世代教員養成センター2号館多目的ホール
- ◇参加者数 19名
- ◇内容 「笑って災害に備えよう」  
講師：奈良教育大学 特任講師 中村 武弘氏



三重県大紀町・南伊勢町にある錦小学校・南島小学校・南勢小学校に校長として赴任した。これら3つの学校の共通点は、南海トラフに面しており、5分で津波が到達する学校という点である。

### ○錦小学校

海拔2メートルの位置にある。

学校の裏には、海拔50メートルの裏山があり、「命があったら、ここで会おうね」と子どもに言っていた。校舎は耐震施設だが、海の砂を使っているので倒壊する恐れがあると言われていた。

郷土料理：手捏ね寿司 を地域の協力で給食に出すなど、学校に協力的な地域である。

### ○南島東小学校

海拔10メートルの位置にある。

学校から投げ釣りができる、入り江にある学校だった。こわごわ教育していてもしかたがないと考え、地域の協力を得て、海での「ふるさと南伊勢を愛する教育（ふるさと教育）」活動を教育に取り入れた。

### ○南勢小学校

海拔13メートルの位置にある。

目の前は太平洋という学校。学校の前の浜は遠浅で、アサリ取などを〈ふるさと教育〉として行った。

## 1. 防災教育の重点内容

### (1) 防災教育の課題

- ①保護者や地域との連携・・・地域と連携した防災管理
- ②活動を継続すること・・・年間計画とカリキュラムマネジメント
- ③児童が主体的に取り組む姿勢を育てること・・・取り組む姿勢を育むための学習活動

### (2) 死なない、生きのびるための防災教育

- ①児童が主体的に活動できるよう通学団単位による話し合い活動を設定した。
- ②様々な状況下での避難訓練を行うことで、児童・教職員の対応力を養う。
- ③地域との連携を重視し、児童の成長過程に応じて役割を変化させていく。

### (3) 今までの学校防災教育との変更点

#### ①第1時避難場所の撤廃

これまで、一次避難として運動場に集まり、人数確認を行ってから、2次避難場所に避難していたが、5分で津波が到達することが予想されるため、運動場への集合をやめた。

#### ②裏山への避難に関して

早い者から学校の裏山に逃げるよう指示した。遅い人が先だと、坂道でつまってしまうため。

### ③受け渡し訓練の撤廃

保護者に子どもを引き渡す「受け渡し訓練」をしていたが、やめた。災害発生直後に児童を引き渡すことは、児童・保護者双方を危険にさらすことになりかねない。災害発生から48時間は学校で児童を預かり、保護者には保護者自身の安全を図るよう依頼した。



### ④避難の仕方

低学年児は「静かに」避難するのではなく、避難を呼びかけながら逃げる。

高学年児や中学生は、避難のできにくい人を大人と協力してできる範囲で支援する。

### ⑤様々な状況の設定

これまでは2時間目の授業の終了時など、授業時間中に避難訓練を行っていた。年間4回であった避難訓練を8回に増やし、授業時間中だけでなく、休憩時間、清掃活動中、登下校時など、いろいろなパターンで実施するようにした。

バス通学の児童生徒もいるため、バスを運営する会社と連携し、児童・生徒の動きを想定した運転手の役割などについて連絡調整を図った。

### ⑥年間カリキュラムの作成と全校防災学習

実践的な対応力を養うためには、年間カリキュラムに基づく継続的な防災教育が必要である。しかし、授業時間を削ることや負担感が増すことに対しては、全教職員の理解を得ることができない。年3回の保護者懇談会の時間に全校児童を体育館に集め、校長自らが全校防災学習を行うことで、教職員の理解を少しずつ広げていった。

### ⑦訓練を通した児童自らの自覚を促す

教員による指示ではなく、自分の判断で避難する力を養うために、避難訓練中の活動を写真で記録し、全校防災学習時に映像で示すことで、考えさせるようにした。

通学団ごとに、リーダーを中心に、場面に合わせた自らの動きを想定し、実行できるように、簡単な手順とルールを作らせた。

## 2. 各学校での具体的な取り組み

### (1) 錦小学校での取り組み

- ・昭和19年の南海地震で生き延びた人に話を聞く学習を行う。

「山に逃げろ！」と言われ、逃げて助かった。

まずは避難訓練。いろんなパターンで自分で判断して行動するように。

昼休み 運動場の真ん中に集まって、その後、山に走っていった。

①自分たちで予測して行動する。

②「ここまできたらだいじょうぶやろ」で、安心しない。



- ③最終的には一人で判断できる、が命を救う。
- ④避難訓練でしていないことは、実際の場面で行動できない。だから何パターンもする。

フィールドワーク教員研修

防災マップづくり どこが危険で気を付けるのかを共有

- ・下校時の実際の訓練  
津波避難タワーにむかって走る。

(2) 南島東小学校

- ・いったん運動場に集まってから、海側の山に逃げるようになっていたのを①運動場に集まらず、各自で②海とは反対側の山に逃げることにした。
- ・親子で土曜授業に体験学習をした。  
親子で防災マップづくり。
- ・津波避難訓練 裏山に逃げる
- ・登下校時避難訓練 この場所ならここに逃げると各自で判断して逃げる

3. すべての学校現場で実施してほしい防災教育の実際

- ・学校の認識は海拔が高くなると薄れる傾向がある。
- ・町・教委・議員と連携し 72 時間生きのびるために、学校に備蓄品を置く。  
うちわ、シート、備蓄用パン、水、替えの服を持ってこさせておく
- ・備蓄品は何か所に分散する。
- ・色々なパターンを想定し、集合場所も再考する。
- ・子どもたちに考えさせる取組をさせたいが、年間計画に空きがない。



家庭訪問期間・個別懇談期間の裏側などを使って9時間を生み出す。カリキュラムの作成をした。

(1) 自分の命を守るために

「一人ひとりで考えておくこと」防災シート

	生き残る	生きのびる	元に戻して次につなげる
自分が	安全な場所	持ち出し品 備品	生活再建
家族が	家の対策 てんでんこ	171 電話 集合する場所	生活再建 避難生活
地域で	助け合い・避難訓練	避難所生活運営	復興まちづくり・災害の記録
学校のみならず	緊急対応	被災者支援	復興計画策定

(2) 学校からの帰り道で大地震が起こったら

場所	予想される危険	身の守り方
家の近く		
交差点		
自動販売機		

(3) 三重県作成の防災ノートも活用した防災教育を行う。全校防災学習

- ・下校時に津波を想定した避難訓練

防災ノートで学習したのち、実際の避難訓練で体験することで実感できる。

「下校途中で地震が発生したら」シート

自分で考えてまとめさせることが大切。危険予知力を育てる。

(3) 発達段階にあわせた指導

- ・低学年は自分の身を守る
- ・高学年は他に人のことも考える

○同じことを毎年繰り返すことで、体にしみこませる

(4) 教職員の意識を変える

- ・裏番組（保護者面談の時間）に校長が防災学習を指導し、指導しているところを見せることで変わっていった。
- ・時間をかけて説得して、共通理解した。

